

第1部「地域を捉える視点」のまとめ

柳原邦光

1. マクロの視点と長いタイムスパンで地域を捉える

- ・マクロの視点：日本の地域構造を把握し、そこから個々の地域をみる
- ・長いタイムスパン：数百万年の時間、あるいは縄文時代から現代までの時間（とくに江戸期以降）のなかで変化していくマクロな地域構造を考える。

(1) 経済から地域を捉える（光多先生）

〈ねらい〉

- ・人口の推移と人の動きを通して、日本の経済的な地域構造とその変化を捉える。また、日本の全体的な地域構造のなかで個々の地域を考える。

〈事実〉

- ・人口の増加は産業技術の発展と関わりがある。江戸期、明治時代、戦後経済成長期に著しく増加。
- ・江戸期は、人の流動が小さく、地域間人口のバランスがよかった。日本海側が物流の中心で、人口も南関東や近畿より大きかった。
- ・物流と人の流れの中心が日本海側から太平洋側へ移ったのは明治以降。この時期に社会資本の整備（港湾と鉄道）、軍需工場や旧制高校や旧帝国大学の配置などが決定され（政治的判断と地形・自然条件）、太平洋ベルト地帯が形成された。戦前の産業構造が戦後の地域経済構造の芽となった。
- ・戦後は、経済成長段階に応じて工場の立地に適した地域が変化していき、人の動きもそれに応じて推移した。サービス経済化したのちは、あらゆる意味での東京一極集中が進行中。
- ・今後は、地域間人口移動のあり方とそのファクターが変わるかもしれない。

〈ポイント〉

- ・人の移動と経済的な地域構造との間には密接な関連がある。経済的な地域構造が人の動きに大きく影響している（この構造にしたがって人が動く）。
- ・この構造を生み出したものは、経済の動きの他に、政治的判断や地形・自然条件。
- ・今後は、人々が何を求め、地域がそれに答えることができるか否かが重要になる。

(2) 大地から地域を捉える（矢野先生）

〈ねらい〉

- ・地形・地質と人間の活動や社会が必要とするものとの関係を考える。

〈事実〉

- ・地形・地質の条件は、人間の歴史においてはほぼ不変。
- ・しかし、江戸期から今日までに、中核地域は日本海側から太平洋ベルト地帯へ移動し、日本海側の周辺化が進んだ。後者の地域は、半周辺地域と周辺地域へ分化していった。
- ・鎖国していた江戸期には大型船舶の開発ができなかったこともあって（政治的判断）、波が穏やかな瀬戸内海・日本海沿岸が北前船による物流のメインルートとなった。地形・地質的には、小規模な港があれば十分で、瀬戸内海・日本海沿岸はこの条件にかなっていた。
- ・開国して、西欧近代発の工業化に直面すると（世界システムへの編入）、それに応じた鉄道網・大型船舶と大規模港湾・産業構造が必要になった（世界システムのレベルでの経済的要請と政策的判断）。中心は、地形・地質的にそれに適した太平洋側に移り、三大都市圏が生まれた。周辺にと

どまるのか、半周辺化するかは、ひとつには、この三大都市圏に接続することができる地形的条件の存否にかかっていた。

〈ポイント〉

- ・ 時代によって人間や社会の求めるもの（諸条件）が変わり、地形・地質との適合関係も変わってくる。地形・地質は人間の生活・社会のあり方・経済的な地域構造を枠付けるが、すべてを決定するわけではない。重要なのは両者の相互関係。

【小括】

- ・ 地形・地質の観点と人口や経済の動きの観点から日本の地域構造を捉えて、そのなかでの個々の地域のあり方を考えようとしている。いずれの観点も、一人ひとりの人間の判断を越える大きな枠組みを念頭においている。
- ・ 人間の生活、とくに経済生活はこの枠組みに相当程度規定されている。
- ・ この枠組み（地域構造）は、地形・地質をはじめとする自然条件と日本を越える広域的な、あるいは世界的な諸関係（客観的諸条件）との関係において形成されるが、それだけでなく政策的な判断などの人間の諸活動とも関係している。
- ・ 地域は、客観的諸条件と人間の判断・働きかけとの相互性の観点から考えるべきである。

2. 個人から地域を捉える

- ・ 人間の認識の仕方から地域性と個人の生き方との関係を考える
- ・ 〈わたし〉から〈わたし〉を取り巻く構造と関係性（地域、社会、グローバルなつながり）を考える
- ・ 人間を移動する存在ととらえ、そこから人と地域性との関係を考える

(1) 文化から地域を捉える（吉村先生）

- ・ 人間の認識の仕方
帰納（経験から法則を考える）と演繹（法則から経験を説明する）、表象（感覚や知覚を通して思い描かれた絵像）によって形成される個々人の「世界」（「宇宙」）認識。
- ・ 「批評の循環」
主観的把握を克服するために、帰納と演繹を永遠に繰り返し、仮説的な法則を現実に適用し検証し修正する。このプロセスを通して仮設的法則を徹底的に精緻化し、認識の精度を高める。これが学問である。
- ・ 人はすべて地域性（地域文化）のなかに生れ落ち、それを身体化していく
この身体化された地域性それ自体は、他の地域性と同等である。この地域性の尊重なしには、人間の尊厳も生の充実もありえない。
- ・ 同じ地域性を身体化している人々の間には、「世界」認識において何か共有するところがある。
- ・ 個人は、事実として存在する世界を、「批評の循環」を通して、できるだけ正確に理解することを目指すことが望ましい。しかし、この場合も、意識化できず、対象化もできないために、「批評の循環」の対象にはならないものもある。したがって、人間は人間のすべてを制御できるわけではない。
- ・ 個人が地域で生きるということ（個人と地域性との関係）
地域性はそれを身体化した人間にとって自明なものである。このために検証しにくい、検討の

対象になるものもあるはずである。地域性は個人にとって自己の尊厳を構成するものだが、すべてが好ましいわけではない。この場合、地域性を否定するというよりも、「批評の循環」を通してえたもの、あるいは、自分はこうありたいという願望にしたがって、地域（性）に何かを付け加えていく。すなわち、自分にとって「快適な意味空間に加工して」、生の充実を実現することができる。

- ・ 地域性と地域の尊厳は、しっかり目を見開いて世界を見ていかないと、国家に対しても、グローバルゼーションに対しても、守ることができない。

(2) 〈わたし〉から地域を捉える（仲野先生）

- ・ 重要なのは、〈わたし〉 にとっての「生きられた空間」であり、この空間で「生きている」という実感のある状態を実現すること（「拠り所」であるはずの地域を取り戻す）。
- ・ そのためには、社会的世界において〈わたし〉がどういう「位置」にあるのかを知ることが重要である。〈わたし〉の生と地域や社会との関係を考えること、そこに〈わたし〉を位置づけること、〈わたし〉の（いま、ここ）を相対化する力を身につけること（「往復する思考」）である。それは〈わたし〉の幸福だけでなく、〈わたしたち〉の幸福を考えることでもある。つまり、〈わたし〉の生の営みを常に問い直し、「〈わたし〉の幸福」と「〈わたしたち〉の幸福」、構造や関係性を問いながら「これからどうすればいいのか」を考えて、小さな実践を積み重ねていくことが重要である。
- ・ 所与の条件や状況（構造・関係性）に規定されつつも、〈わたし〉がそれを自覚し、それとの間に適度な距離を保って生きること。決して〈わたし〉がすべてではなく、状況と〈わたし〉との相互関係、相互作用という捉え方が重要である。

(3) 移動から地域を捉える（児島先生）

- ・ 人にとって自分の身体のある場所が「ローカルな領域」である。人は移動する存在であるから、生まれ落ちた地域（性）を離れて、別の地域（性）に入っていく。移り住んだところが、その人にとっての新たな「ローカルな領域」となる。こうして、移動は身体に複数の地域性を重層的に織り込んでいく。
- ・ 人が「生きている」という実感をもつためには、この織り込みプロセスがうまくいかないといけない。そうでない場合、疎外感・空虚感（なにをしても「意味がないという感じ」）がつきまとうことになる。〔移動の危険性〕
- ・ 地域は「他者」と出会う場である。地域での「他者」との日常的で具体的な応答を通して、「他者」を識り、同時に自分の中の「他者」を含めて「自ら」を識ることができる。それは自分で具体的に判断して生きてゆくためのまなざしを培うことでもある。この意味で、移動はいわば「旅」であり、その先々で出会う地域は「他者」との接触を通して何かを「発見」する場なのである。〔移動のポジティブな側面〕
- ・ 地域は複数の地域性をもつ人々によって構成されている。移動する人々との交わりを通して地域自体が微妙に変化し続けている。〔地域にはこの変化を受け入れるだけの柔軟性が必要である。この意味で、開かれていることが求められている。〕

【小括】

- ・ 人にとっての地域の重要性と、人と地域との微妙な関係。

- ・誰もが地域性のなかにどっぷり浸かって生きるわけではない。誰もが「生きている」という実感をもつためには、地域性をよく理解しなければならない。それには地域だけでなく、それを越えたところ（構造、関係性、国家、グローバリゼーションなど）にもしっかりと目を向けねばならない。そのうえで、大きな工夫、小さな工夫を重ねて、地域を「生きやすい」方向に向けること（知的で能動的な生き方）が求められている。

3. まとめ

- ・2つの視点、すなわち、マクロのレベルで長いタイムスパンで地域を捉える視点と、個人からの視点との補完性。
- ・地域について考えることは、人の生活や生き方を支えるものであると同時に制約するものでもある構造や関係性、様々なつながりに目を向けることである。
- ・その上で、人が生きやすい状態を実現するための実践が求められている。

第1部「地域を捉える視点」の補足

1. なぜ、今、地域なのか、地域学なのか

(1) 光多先生の見解—国家の役割変化と「地域」への着目—

2つの角度から検討する。ひとつは国家との関係である。わたしたちの生活は様々な制度によって支えられている。これらの制度の根底には、西欧近代が生み出した理念がある。「自由」で「平等」な「個人」、「人権」という理念である。この理念は国民国家によって実現されると考えられてきた。現在の憲法をはじめとして、国家の諸制度はこのような考えからできている。国民国家という枠組みこそが制度構築の大前提になってきたのである。ところが、グローバル化が進む今日では、EU（欧州連合）の例からも明らかのように、国民国家の役割は変わり、その比重は低下しつつある。もはやすべてを国家という枠組みだけで考え決定できる時代ではない。この国家の役割変化が「地域」への着目と深く関わっている。

光多先生の研究によると、「地域」という意識の高まりは、大きく考えて3つの要因に影響されている。一つ目は、国家を越えた巨大な力学が作動する国際的な諸関係と国家との関係である。国際的な諸関係とは、たとえば、大量の核兵器を保持して東西の陣営がにらみ合った冷戦構造、それからグローバル化や市場経済化である。問題はそれと国家との関係である。二つ目が経済の動き、経済の観点である。三つ目が生活重視の考え方である。この三つの要因の絡み合いで注目すべきは、第二次世界大戦以降で、とりわけ、戦後復興が進んで先進各国で経済発展の利益が享受されるようになった1960年代以降の時期である。それまでは戦後復興ということで経済が最優先されたのであるが、この頃から経済優先主義が批判され、人々の生活が重視されるようになって、地域への意識が強まったのである。このとき、次のような主張や見方が現れた。何よりも人間の基本的な必要を充足すべきであること、経済発展も地域固有の人間環境や文化遺産に根ざしたものでなければならないこと、人間と自然との関係、人間相互の関係の観点から、西欧社会の行動原理を見直すべきこと、である。要するに、それまで当然視されていた発想や考え方を見直そうとしたのである。

このような大きな状況変化のなかで登場したのが、ウォルター・アイサードの「地域科学」(Regional Science)の主張である。「地域科学」は、確かに経済や経済社会を重視しているが、検討すべき対象

はそれだけではなかった。人間の生活が展開される空間、つまり「地域」のことであるが、この空間の中で立ち現れてくるあらゆる社会問題、これこそが主要な検討対象であった。ここには人間と社会の幸福の追求も含まれていた。そしてこの問題の解決策を考えることがアイサードのいう地域科学が目指したことである。地域科学は、これらの問題の解決を国家レベルだけでなく、もっと人々の生活に近い「地域」においてこそ探求すべきであるとして、そのための基本的な枠組みと方法論とを提示したのである。これはまさに現在の地域学に通じる見方である。

しかし、アイサードの地域科学は主要な潮流になることができなかった。冷戦構造が強まって、東西陣営という構図で考えることが何よりも優先されたからである。あるいは、そういう構図の中で、国家単位で考えることが求められたからである。こうして国内の地域に目を向けることは難しくなりた。そして、エリア・スタディーズ(Area Studies)というアメリカの世界戦略に適した政策対応的な地域研究と、さらには市場経済化の動きに、アイサードの地域科学は呑み込まれていった。

地域への意識が再び強くなるには、冷戦構造の崩壊プロセスの開始を待たねばならなかった。このとき、ようやく、国家の諸制度のあり方も含めて、人間の生活に深く関わる基本的な諸問題が重視され検討されるようになったのである。国家よりも人々の生活に近い地域を単位として考え解決していく必要性が強く認識されるようになった。

たとえば、先進諸国において、地方の役割が大きくなっている。国の論理で地方の論理に蓋をしていた時代は終わったのである。行政構造は地域主体になりつつある。行政機能についても、国家の役割は個々の単位で調達するよりも共同で調達した方が効率的であるような機能に限定される方向に変化しつつある。国家の指導の下に全国画一的に供給される行政サービスよりも、地域に必要な行政サービスを地域が独自のやり方で調達する方が効率的だと考えられるようになったのである。産業構造の変化も重要で、サービス経済化と「規模の経済」化にともない、東京一極集中とそれ以外の地域の地盤沈下が顕著になっている。これが新たな地域問題として人々の危機意識を高めている。また、低成長と高齢化の時代になって、人々は地域に根差した生活意識をもつ傾向にある。

こうした動きとともに、近代の学問体系もそのあり方を問われることになった。国家を単位にして発想していた学問が多かったからである。こうして現実の諸課題に対応するために、様々な領域を横断的に統合する学問領域の必要性と、地域という空間単位での研究を積み重ねることの重要性とが認識され始めた。ようやく「地域学」が着目されるようになったのである。

ここまでをまとめると、冷戦構造の崩壊とグローバル化の進展、国家の役割変化という大きな状況の変化にともない、まさに今日こそ、人々の生活に近い地域という単位で発想することが強く認識され求められているということである。また、生活を重視する考え方が、経済的な豊かさの追求だけでなく、「生きるとはどういうことか」、「幸せとは、豊かさとは何か」という根源的な問いをともないつつ、前面に出てきたということである。

(2) 廣瀬隆人の見解—地域の豊かさ・良さを見失ったことへの地域住民からの異議申し立て—

廣瀬隆人によれば、「山形学」、「いわき学」、「江戸東京学」などのように地名を付けた地域学や地元学が 1980 年代後半から各地で登場した。それは、1980 年代後半から 90 年代初頭にかけてのバブル景気にともなう地域開発の結果、「地域の豊かさ・良さ」を見失ったことへの「地域住民からの異議申し立て」であり、抵抗としてスタートした。」廣瀬はその特徴を 3 点にまとめている。①自らの調査研究や学びを通じてその地に生きることのゆるぎない肯定感を獲得すること、②肯定感を獲得した上で、地域の課題や現実を学び、地域に暮らし、生きる「自分とは何か」を批判的に振りかえること、③地域の課題と自分の生活を問い直すことによって、自分が地域で生きる意味を問い直

し、地域を変えていく主体となること、である¹。

(3) 西欧近代の問題点—個人化の進展と絆の喪失

もうひとつ西欧近代の生み出した重要な価値観に関わる問題がある。ここでいう価値観とは「個人」とそれを何よりも尊重する考え方である。これについても、「個人の自由」が徹底して追求され、個人化(individualisation)が著しく進んだことによって、新たな問題状況が生まれている。人々はおつてのように強固な集団的な枠組みや規範に縛られることを好まなくなった。このようなものとのつながりを断ち切ってこそ自由になれる、そう考えられてきたからである。実際、この願望はある程度実現している。しかし、その一方で、国家の諸制度は機能し難くなっている。また、集団的なものにも守られなくなって、人々は今、社会的なリスクに直接さらされている。しかも自分で何とかしなければならぬと感じるところまで追い込まれている。人に頼らず、何もかも自分でしなければならぬとか、問題があれば「自分のせいだ、自分で何とかしなければ」という感覚である。確かに人は「個人の自由」を追求し集団的な枠組みや規範から自由になることができたかもしれない。しかし、「無縁社会」という言葉が象徴しているように、それまで暮らしを支えてきたさまざまな絆やつながりまでも失って、「孤立」を深めているのかもしれない。これはきわめて「生きにくい状況」だといわねばならない。

(4) 内山節の見解—近代的世界の問題点と「里」の思想—

内山節は次のようにいう。近代的世界は〈ローカルであること〉を解体しながら、市場空間・市民社会・国民国家という普遍的世界をつくりだし、そこに人々をのみ込んできた。近代的世界という理念もまた、自然や歴史、地域や協同といった、具体的な関係の中で生きる人間の世界を壊し、人間を普遍的な個に変えて、交換可能な個人にしてしまった。自由・平等・友愛の理念はあまりに人間中心主義的である。そのために、人間が長い間自然や風土などとの間に築いてきた豊かな諸関係を視野の外に追いやった。結局、人々は自分の居心地のよさにしか関心を示さなくなり、連帯やさまざまな関係性を見失った。要するに、普遍性と抽象的な個人をよしとし、ひたすら個人の自由を追求する近代の理念は、人々の視野を狭め、自然をはじめとする複雑な諸関係のなかで展開される人の生活の様々な側面とその意味を見えなくしたというのである。

さらに、内山はいう。生きるとは何か、それはその人の暮らす文明、文化、歴史のなかでさまざまにつかみとられていくものだ。普遍化できるものではない。普遍性にのみ価値を見出す精神の習慣から解放されねばならない。そのために「私自身から出発しよう」、「『里』というローカルな世界」からすべてを組み立てなおそうと。内山のいう「里」とは何か。それは必ずしも村ではない。「自分が還っていきたい場所」、「自分の存在の確かさが見つけられる場所」である²。

(5) まとめ

以上のことを合わせて考えてみると、これまで制度的に私たちの暮らしを支えてきた、西欧発の国民国家と自由で平等な個人という理念、「普遍的」だとされてきた理念だけでは、「わたし(たち)

¹ 廣瀬隆人「ローカルな知としての地域学」、日本社会教育学会編『日本の社会教育』、52号、2008年、41、45頁。

² 内山節『「里」という思想』、新潮社、2005年、「はじめに」を参照。内山の見解は「ローカルな場所からの出発」(『地域学への招待』所収)に簡潔にまとめられている。本文でも述べたように、内山は近代的世界と近代的世界(「人間の本質は個人にある」とし、「すべてが個人に始まり個人に終わる、裸の個人の世界」)には批判的である。「私」は他者との関係においてつくられると考える内山にとって、問題は、人間が関係を喪失してしまったことである。「関係とともに生きること」が不可欠であり、「地域」はそのひとつの形である。「様々な関係がみえる、感じられる世界」、それが「地域」だという。

の幸福」は実現できないのではないかという思いが大きくなりつつあるようである。ここでいう「普遍的」とは、どんな場所でも、どんな時代にも通用すべきもの、間違いのないもの、という意味である。西欧近代は、自分たちの見出した価値観をこのようなものだと考えて、それを世界に拡大することをよしとしてきたのであるが、それだけではうまくいかないのではないかという疑念が出てきたのである。

このような状況において、今求められているのは、徹底して個人として生きることでも、国家に代表される、一人ひとりの暮らしから遠く離れた巨大な存在に守られて生きることでもない。国家と個人の間において、もっと身近なところで人々を支えるものではないだろうか。というのは、人はみな、なんらかの具体的な「つながり」、「支え、支えられる関係」を必要とし、そのための「場」なくしては生きられない、と思われるからである。

さらにいえば、「つながり」というとき、人と人とのつながりに限らないかもしれない。土地とのつながり、過去や過去の人々とのつながり、土地の文化とのつながりもあるだろう。過去とのつながりについて、内山は、長期にわたって繰り返されてきた人間の営みは、景観や土地、建物などに刻印され無言の記憶となっているという。つまり、過去は完全に過ぎ去ってしまったのではなく、このようなものを通して現在に生きていて、人に過去との確かなつながりを感じさせる、ということであろう。これを読んだとき、筆者は「なるほど」と納得した。古いものに接したとき、なぜか心が落ち着くが、その理由をうまく説明していると思ったからである。わたしたちには、何かとつながっているという実感が必要なかもしれない。やはり、人は、誇りと生きがい、喜びを感じて生きたい、他者とつながって互いに支え合う関係を築いて、ここが自分の居場所だと思って生きたい、そう実感できる場を求めているのではないだろうか。これこそが「地域」であって、地域という発想の原点にあるのは、このような要請であろう。地域学は現代という時代の抱える根源的な問いに答えなければならない。

2. 地域学の現在(2009年度までの地域学総説の成果)

地域学の目的は、「地域」という空間で「生の充実」、「わたし(たち)の幸福」の実現に寄与することである。「地域」とは、自然環境や社会環境、人と人との結びつきを含めて、何らかのまとまりをもった、緩やかで曖昧な空間である。地域学の基本的な仕事は、この空間において、経済的な諸条件を含めて「人として安心して幸福に生きていく」ために必要な諸条件とはなにか、それを実現するにはどのような方法があるのか、を考えることである。人と人との関係についていえば、人と人が支え合う関係とそのための場を発展させる諸条件と方法を考えることである。換言すれば、「現実の地域」と「望まれる地域」との間に隔たりがあることを認めて、これをできるだけ埋めていくことが、地域学の目標である。この意味で、地域学は「実践の学」である。

地域は決してあらかじめ大きさを特定できる空間ではない。あくまで、検討されるべき問題によって地域の広がりが決まる。地域はまた単独で存在できるものでもない。他の空間との関係性・重層性を常に視野に入れて検討されなければならない。地域学の対象とする空間規模は多様で、その関係は複雑である。

しかし、ひとまずローカルな空間を出発点として考えたい。というのは、ローカルな空間は人々の身体が存在する暮らしの場であり、生身の人間としての存在はここから始まると考えられるからである。「地域」や「地域学」への期待が現代を生きる人々の根源的な不安に由来しており、生活に近いところで考えることが求められているだけに、この空間において日々の生活を支える諸関係、「生きている」という実感につながる様々な「つながり」、これらを確認したいのである。「つなが

り」として最初に想起されるのは、人と人との結びつきであるが、それだけではない。自然との関係、土地との関係、過去との関係、死者や死の世界との関係、もちろん、労働や生産に関わる関係も含まれている。このような諸関係を総体的に捉えて「地域性」ということができるだろう。

どのような空間規模で考えるとしても、地域学は、地域性の解明という次元だけでなく、国家の諸制度や経済システムなど、地域を越えるものとの関係も検討しなければならない。そうして、地域性を尊重しつつ、誰もが人として生きやすい状態を考え、そのために実践することを目指すのである。このとき動員されるのは、アカデミックな知だけではない。地域学は、暮らしの場に生きている知恵・技術・哲学（「生活の知」）に多くを学ばなければならない。地域学は2つの知の接近の試みである。

地域性を把握し、そこから「誰もが人として生きやすい状態」を考えるのは、容易なことではない。地域学は、人と地域との関係、人の生や幸福にとって地域がどのような意味をもっているかを理解するための視点として次の3つが重要だと考えている。

ひとつは〈「わたし」からの視点〉である。この視点は地域を自明視してそこから発想することを前提にはしていない。むしろ地域の存在と意味を実感できない「わたし」が様々な「つながり」を発見し、そこに「わたし」を位置づけるための作法である。「わたし」が想像力を介して生きている空間（「生きられた空間」）を知るための方法なのである。こうして得られた認識から、『わたし（たち）の幸福』は何に支えられているのか、「何が重要なのか」、「何が問題なのか」、「これからどうしたいのか」、「どうするのか」を考えるのである。

2つ目は〈構造的視点〉である。地域は自然環境と人間の営みとの相互作用から生まれたものである。人の暮らしは自然という土台の上で営まれている。それは暮らしが自然に支えられ規定されているということだが、その一方で、人は自然に働きかけて暮らしを創ってきた。暮らしはこの働きかけの結果でもある。この自然と人間の暮らしとの関係から地域の構造と特性を解明すること、さらには、もっと大きな空間における地域の位置関係を把握することなど、地域のなかにいる「わたし」からは見えない関係性を、地域から距離をとりつつ解明しようとする視点である。さらに、〈「わたし」からの視点〉で捉えた問題を含むさまざまな問題の解決や望ましい状態の実現、そのための方法を、現実の地域をベースにして考える、政策的実践へと向かう視点である。

3つ目は〈移動の視点〉である。人は移動する存在である。この視点から見たとき、人と地域（性）との関係はとても複雑なものになる。地域における諸関係や「つながり」は、移動する人にとっておそらく固定的なものではない。それらは相対化される。というのは、人は唯一の関係のあり方、「つながり」の型だけでなく、複数の地域（性）を生きているからである。諸々の地域（性）との間に適度な距離をおいているだろう。人は新たな地域（性）に入っていくことで、他者と出会い、新たな自分を発見し、変化していく。地域もまた、移動する人々との出会いによって微妙に変化していく。この視点に立ったとき、地域は「開かれていること」、「柔軟性をもつこと」を期待される。移動する人々にとって、人と人との「つながり」は選択的なものになる。地域にはそれを許容することが求められるだろう。

以上が、2009年度地域学総説をベースにして語ることのできる、鳥取大学地域学部の地域学である。ここまでの地域学は、人々の生や暮らしをよくしていくための実践的な方法論というよりも、「地域を考えると、地域に向かうとき、つねに視野に入れておくべきことは何か」ということに重点があるように思われる。